

# 平成 30 年度水環境文化賞を受賞して

阿蘇海環境づくり協働会議 座長 今 井 一 雄

## 1. 活動の背景

我々が活動している阿蘇海は、日本三景「天橋立」で外海と隔てられている閉鎖性水域「汽水湖」であり、高度成長期の頃から生活スタイルの変化や工業生産の増加、流域にある森林の手入れ不足、農地の化学肥料への転換など様々な理由により、流入負荷が増大し、富栄養化が進行した。これにより底質付近では無酸素・貧酸素状態となり、浅瀬ではアオサやオゴノリなどの藻類やカキの異常繁殖が生じこれらが腐敗し、悪臭を放つとともに、海面を超えてカキ殻が堆積し「カキ島」が形成されるなど、景観の悪化やカキの浸食によるアサリ漁場喪失、船舶運航への支障など多くの課題が生じた。

これらの課題解決のためには、阿蘇海への流入負荷の軽減が重要であり、阿蘇海流域全体での環境改善への機運を醸成し、具体的な取り組みを進めることにより、持続可能な阿蘇海流域の環境改善を進めていく必要がある。

このため、平成 19 年 5 月に活動の推進母体として、環境分野を専門とする団体や地域企業をまとめる商工会議所・商工会、観光協会、農業団体、水産団体、まちづくり団体、教育関係者、行政が一堂に会し、大学等の専門家にも参画いただき技術支援等も受けながら活動する「阿蘇海環境づくり協働会議」（以下「協働会議」という。）を設立し、活動をスタートさせ、多くの取り組みを実施してきた。

## 2. 活動への思い

阿蘇海的环境改善は、地域住民・企業などが「自分たちのまちの環境は自分たちで守る」という意識を持ち、行動することが最も重要であると考えている。このため、協働会議構成団体を中心に地元住民を巻き込み、海岸や流入河川の清掃などの環境改善の取り組みを行うとともに、環境改善のチラシの作成・配布、小学校や地域企業に出向いての勉強会の開催、環境ポスターコンクールの実施など地元住民、とくに次世代を担う子ども達に啓発する活動を実施してきた。

これらの活動により、地元で徐々に阿蘇海環境改善への機運が高まる中、更なる展開を目指し、阿蘇海流域全体の将来像や課題、今後の取り組みについて話し合うワークショップを計 4 回開催し、延べ 151 名の参加者による熱心な議論の結果をもとに平成 27 年 3 月に「阿蘇海流域ビジョン」を策定し、「みんなの力で取り戻そう！未来へ注ぐ阿蘇の海」をスローガンに地域全体で取り組む指針ができたところである。

このような機運の高まりに対して、流域自治体である宮津市と与謝野町においても、平成 28 年 4 月には、住

民・事業者および行政が一体となって行動するための規範である「美しく豊かな阿蘇海をつくり未来につなぐ条例」を両市町で制定し、同時施行されたところである。これにより、協働会議設立時からの思いである、流域全体で取り組んでいく礎ができたところであり、一層の取り組みを進めていきたいと考えている。

## 3. カキ殻の除去と活用について

次に、受賞対象活動としていただいた、カキ殻除去と活用について述べたい。環境悪化の象徴としてマスコミに取り上げられるなど問題になっていた、カキ殻堆積による「カキ島」については、表出している部分だけでも堆積量は、約 1 千トンもあり、さらに年々新たに堆積することから平成 21 年から協働会議構成団体を中心に除去活動を実施してきた。このような中、平成 27 年からは、活動に賛同いただいた NPO 法人国際ボランティア学生協会（略称：IVUSA）の協力を得て、毎年、夏と冬に 100 名を超す学生が参加し、地元住民などと一緒に大々的な回収活動を実現。これまでに約 300 トンものカキ殻の回収を実施した。この結果、カキ殻回収の取り組みが環境改善の象徴としてよいイメージで報道されるなど、多くの人の知るところとなり、その効果は非常に大きなものとなっている。

また、課題であった回収した大量のカキ殻をどうするかについては、地元のワイナリーで栽培されているブドウ畑で石灰の代わりとして活用が進められている他、桑畑、ミカン畑などでも肥料として活用する取り組みを進めている。

さらには、地元企業や地域団体と連携し、カキ殻を活用したレンガや漆喰などの建築資材への活用の検討や放置竹林の整備でできた竹を混合した土壌改良材づくりなど、ゴミとして処分した場合、膨大な費用がかかるカキ殻を再資源化することにより大幅なコストダウンに結びつけるとともに、地元団体などとの新たな協働が進むなど、地域の活性化にも繋がってきている。

## 4. 終わりに

美しく、文化的にも非常に価値のある天橋立を世界文化遺産に登録するための活動を地元で進めている。この景観を守り次世代に残していくためにも、協働会議では、引き続き外部の力も借りながら、流域全体を巻き込んで美しい阿蘇海を取り戻す活動を一層進めていく所存である。

末筆になりましたが、このような栄誉ある機会を与えていただきました関西支部をはじめ、日本水環境学会の皆様へ深く感謝申し上げます。